

二三一六番

奈良山ならやまの 峰みねなほ霧きらふ うべしこそ まがきの
もとの 雪ゆきは消けずけれ

二三一七番

こと降ふらば 袖そでさへ濡ぬれて 通とほるべく 降ふらなむ
雪ゆきの 空そらに消けにつつ

二三一八番

夜よを寒さむみ 朝戸あさとを開ひらき 出いで見みれば 庭にはもはだら
に み雪ゆき降ふりたり

二三一九番

夕ゆふされば 衣手ころもでさむ寒さむし 高松たかまつの 山やまの木きごとに 雪ゆき
そ降ふりたる

二三二〇番

我わが袖そでに 降ふりつる雪ゆきも 流ながれ行いきて 妹いもが手本たもと
に い行ゆき触ふれぬか